

一九二二年には資本主義列國の會議が目まぐるしい程度々開かれた。前年から續いてゐたワシントン會議は二月に終つたが、四月にはゼノア會議、六月にはヘーグ會議、八月にはロンドン會議が開かれた。ワシントン會議はワロバン王から押いて、さし方を短かくしようとの相談がまじり、人類の平和」を看板にして、海軍力の縮少、海軍休日が協定せられた。

ゼノアからロンドンに到る諸會議は、前に述べた獨逸の賠償金、殊に勞農露西亞の通商が開始出来なくば世界は共倒れだといふ危険を眼前にして、資本主義列國が集つたのであつた。

處が賠償金の方は獨逸から「ふい袖は振られませぬ」ミアペコベに高飛車に出られ、賠償金を負けてやらうじやないか、イヤ負けられぬで、英國と佛蘭西の内輪探めをさらけ出したのが落ちになつた。

露西亞の通商の方は「通商はしよう。然し勞農露西亞の承認はいやだ」こ憶柄な手前勝手な云ひ出したので「俺達は世界を必要としない」こはない、然し世界が俺達を必要とする程ではない、「ミレーニンから奇麗にはねつけられて了つた。

九月に長春で開かれて、決裂した日本と露西亞の會議も、同じ様な一幕を東洋の片田舎で繰り返したまでのこゝであつた。

三

こうして一九二三年の世界は經濟的恢復の苦悶を以て始終せんとしてゐるが、同時に勞農露西亞が堂々世界の舞臺へミ乗り込んで來た年である。蓋し今日及び今日以後の世界經濟の主要問題は「露西亞の通商」を度外視しては解決が出来ないであらう。

獨逸の賠償金はある國——佛蘭西の爲めには親の仇でもあらうが、獨逸産業の恢復と獨逸の盛んな通商が世界經濟の恢復の爲め必要なこゝは、露西亞の通商が必要であるのこ變りはない。だから英國は賠償金の減額を主張したが、米國からの借金さえ捺引にしたらえれば賠償金を取らないうこが一番い、のだらう。——歐羅巴の諸資本國は戰爭をやる爲めに米國から大變な金を借りてゐるのである。

そこで如何しても世界經濟の恢復の相談は「露西亞の通商」を中心にして回轉せざるを得ないのである。そして「露西亞の通商」こいふ問題は、直ぐその裏に「勞農露西亞を承認せよ」こいふ難問を持つてゐる。

もしく資本主義列國が露西亞の經濟封鎖を取つたのは、露西亞に起つた勞働者の政府を兵糧攻めにして、やつつけようこいふ下心であつた。そしてそれは外の原因と働き合つて今日の悲惨な